ARTICLE

富山県のウェルビーイング指標から生涯学習の促進を考える

～学びに目を向けウェルビーイングを深めていく生涯学習実践のかたち～

地域学習プラットフォーム研究会　柵　富雄

はじめに

富山県は県民の生活向上や地域の発展を進める政策にウェルビーイングの視点を取り入れている[1]。また、文部科学省では教育振興基本計画にウェルビーイングの視点を取り入れ、生涯学習支援や社会教育における役割の一つとして位置付けた[2]。

学ぶことで心が豊かになりウェルビーイングが向上するかと問うと人はそうだと答える。一人ひとりの継続的な学びによってウェルビーイングは向上したことを確かめようと、長年実践研究に取り組んできた社会人の学習の実践データを分析したところ、これを読み取ることができた[3]。

これを手がかりとして、一人ひとりが自身のウェルビーイングの向上を意識し、自立的に学び続ける生涯学習の実践に役立てることができないか検討した[4]。

本稿では、はじめに富山県のウェルビーイング指標と活用の状況を紹介する。次に、学習の実践がウェルビーイングの向上に寄与する可能性について、社会人の学習実践者を対象とした分析を紹介する。さらに、これらの分析を通して学習に目を向ける自己動機づけとウェルビーイングの関係性について考察を述べる。その上で、ウェルビーイング指標を自立的な学習の実践に役立てる考え方と具体的な方策について提案する。

1．富山県のウェルビーイング指標と活用の状況

富山県は全国に先駆けて令和５年１月にウェルビーイング指標[5]を公表した。そのねらいは、県民一人ひとりと県民への施策を担う行政の両方に向けられている。県民に向かっては、一人ひとりが意識して「自分のこと」を考えることがウェルビーイングにつながる第一歩だとし、指標を役立てようとするものである。県行政に向かっては、県民がウェルビーイングをどのように意識しているかを把握し、様々な施策に反映するとともに、その効果を検証するためとしている。漠然とした主観を可視化することに指標を活用し、これまでの客観的データでは捉えきれな

柵　富雄
（さく　とみお）
修士（教育学）、博士（人間文化学）、特定非営利活動法人地域学習プラットフォーム研究会（理事長）、公益財団法人学習情報研究センター（主幹研究員）、慶應義塾大学SFC研究所（上席所員）、株式会社ジェック経営コンサルタント（顧問・人材社会研究室主幹研究員）、総務省地域力創造アドバイザー
主な著書等：『生涯学習eプラットフォーム』（単著、明石書店）、『生涯学習eソサエティハンドブック』（共著、文憲堂）、『学習指導員講習テキスト1「生涯学習基礎編」』（共著、日本通信教育振興会）、『IT時代の学習基盤・生涯学習プラットフォーム構築手引書』（編著、文部科学省）、『シリーズ「大学と社会を結ぶeポートフォリオ」』（共著、教育新社「文部科学教育通信」）、『参加して学ぶボランティア』（共著、玉川大学出版部）

い県民の主観的状況を測定して施策に役立てたいというねらいがある。例えば、女性活躍社会を進める政策や子育て支援のための政策には、働きがいや困ったときのつながり感は大切な要素と言われ、これらを主観的な面からも捉えようとするものである。

このようなねらいを持った富山県のウェルビーイング指標策定の経緯や体系、活用の状況を紹介する。

(1) ウェルビーイング指標策定の経緯

富山県は令和4年2月に「富山県成長戦略」[6]を策定している。その中で、ウェルビーイングを戦略の中心に置き、様々な政策全体に通じる考え方と位置付けた。政策立案にあたって県民の真の幸せのためのニーズを把握し、県民起点で政策に反映するとともに、政策の効果を検証することとした。そしてこれを進める第一歩としてウェルビーイングを測る指標が策定された。

(2) ウェルビーイング指標の内容

ウェルビーイングを測定する指標は経済協力機（OECD）のガイドラインや、米国ギャラップ社の主観的ウェルビーイング調査による5つの指標（Career, Social, Financial, Physical, Community）など多数存在する。

富山県が策定した指標は、総合的な主観的ウェルビーイング、その要因となる分野別指標、社会的な関係を捉える指標の3つの区分で構成している。

1）一人ひとりの主観的ウェルビーイングを総合的に捉える「総合指数」

最も理想的な状態（ありたい姿）から、最悪であると思う状態を11段階で主観的に評価する。

2）一人ひとりのウェルビーイングを様々な側面から捉える「分野別指標」

「心身の健康実感」「経済的なゆとり実感」「安心・心の余裕実感」「自分らしさ実感」「自分時間の充実実感」「生きがい・希望実感」「思いやり実感」の7分野で構成している。それぞれの設問について「はい」から「いいえ」の4件法で自己評価する。

3）一人ひとりのウェルビーイングを支え高める社会的な関係を捉える「つながり指数」

「友人」「家族」「職場・学校等」「地域」そして「富山県」とのつながり実感を評価する。合わせて22の設問に4件法で自己評価する。

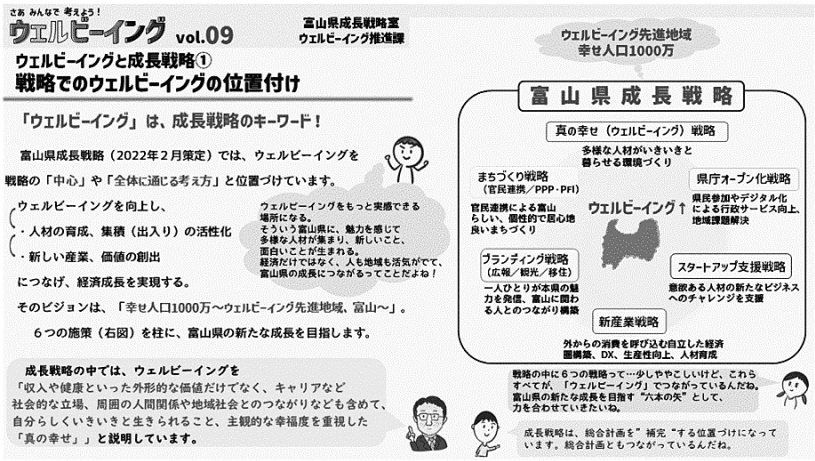

図１　富山県成長戦略でのウェルビーイングの位置付け（富山県公式webより引用）

(3) 策定したウェルビーイング指標の特徴

まず挙げられるのは、3つの側面、すなわち「自分自身で実感できること（主観的）」、「一時的でなく続いていること（持続性）」、「一人ひとりそれぞれ異なる姿があり、様々な共通の要素が影響し合っていること（多様性・多面性）」である。「自分らしく、いきいき

と、自分にとっての良い状態＝ありたい姿・幸せ」をこの3つの側面で捉えようとしている。

また、時間軸を意識して評価しようとしている点も注目したい。現時点の実感だけでなく、現在を起点にして過去（5年前）とこれから（5年後）の評価も行う。一人ひとりに振り返りとこれからを考える予見の機会を提供する点で重要な意味がある。

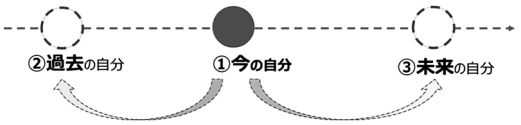

図2　ウェルビーイング指標の評価の際に時間軸を意識する
（富山県公式Webページより引用）

（4）ウェルビーイング指標の活用の状況

令和5年1月の指標の公表と合わせて、政策の立案・取り組み・評価を行う体制を整備した。ウェルビーイング戦略プロジェクトチームは、ウェルビーイングを視点とした重点課題の抽出や県成長戦略アクションプランへの反映、過年度における取り組みの検証を行い次年度に生かすというPDCAサイクルを機能させている。そのため、令和4年度から定期的に「ウェルビーイング県民意識調査」を行っている[7]。その結果もふまえて令和5年度は、「女性のウェルビーイングの向上」、「働き方改革」、「ワークライフバランスの推進」を重点的な取り組みに挙げるとともに、30の事業にウェルビーイング指標との関連を示した[8]。

このように、データを根拠に政策を立案する取り組みは、EBPM（エビデンス・ベースド・ポリシー・メイキング＝証拠に基づく政策立案）として近年注目されており、富山県の取り組みが「地方公共団体における統計データ利活用表彰」で総務大臣表彰を受けた[9]。「主観的・多面的・持続的な「ウェルビーイング（well-being）」を捉える指標の策定と向上施策の展開」が評価されたとしている。

一方、県民への意識浸透と活用はこれからという状況である。県はウェルビーイングの捉え方や指標の説明、自らのウェルビーイングをチェックできる特設サイト[10]を設けるなどを呼びかけているが、令和5年8月～9月に行った県政世論調査[11]では、「言葉も意味も知っている」、「言葉は知っているが意味は知らない」を合わせた42・9％に比べて、「言葉も意味も知らない」は56・2％と過半数を超えている。公表後半年余りの時点の状況としては必ずしも低いとは思わないが、まだまだ浸透していないとする見方は多い。

富山県は、政策としての活用の体制づくりや具体的な政策への反映の面ではまさに先進県と言える。一方、県民一人ひとりが自己決定的にウェルビーイングを深めるための活用はこれからという状況である。自分の可能性をより高め、自分らしく、より良く生きる生涯学習の実践はその重要な行為の一つになり得る。これを後押しする社会教育行政の役割も大きいのではないだろうか。

2．学習活動とウェルビーイング

学ぶことがウェルビーイングの向上に寄与するという考えについて誰も否定しない。しかしこれを普遍的な意味として実証することは難しい。ウェルビーイングの状況をどのように意識するか、その水準は主観的で一人ひとり異なる。ウェルビーイングの変化に与える要素も幅広いうえ、学習の実践による関与はその一要素として捉える必要がある。その学習は、一人ひとりの社会的文脈の中で意図的に行われる場

合も有れば無意図に生じる学びもある。

これまで人との知識交流や学びによって、状況の悪い中でも視野を広げ、課題解決の手がかりを得て実際に新たな活動を始める人を多く見てきた。生きがいを見出し、人生の生き直しに結びついている多くの人がいる。学習の実践がウェルビーイングの向上に結びついている「実態」がある。限定的であってもこれらの人たちを説明することができるのではないだろうかと考え、長年にわたって実践研究に取り組んできた参加者を対象に分析を試みた。分析の対象としたデータは、1999年から官民学で運用してきたインターネット市民塾[12]の参加者の実践期間中のポートフォリオであり、これをテキスト分析した[13]。

活動を始める際の言葉（図3－1）と、1年後の言葉（図3－2）を比較しところ、始める前に多く現れていた〝退職〟、〝ストレス〟、〝人間関係〟、〝子育て〟、〝現役時代〟などの言葉は、1年後の振り返りではほとんど見られなくなり、代わりに〝自信〟、〝新しい〟、〝自分〟、〝プラス〟という言葉が現れている。また、〝出版〟、〝発信〟、〝チーム〟など社会活動に関する言葉も現れている。活動を通して社会に目を向け、新たなモチベーションが生まれていることが確認できる。

参加者はこの間に幅広い世代との知識交流を始め、自身の新たな役立ち方とそのための学びに目を向けている。

この変化をウェルビーイングの視点で説明しようと、富山県が公表している指標に照らし合わせて試行的に分類した[14]。（表1）

1年の間に、ウェルビーイング指標に対応して言葉が肯定的に変化している。そしてまちづくり活動や起業家としての活動など、新たな人生のステージを実際に拓いた。母数が少ないため必ずしも代表した説明とは言えないが、学習の実践によってウェルビーイングの向上に結びついたことが、この間の多くの学びの記録からうかがえる。

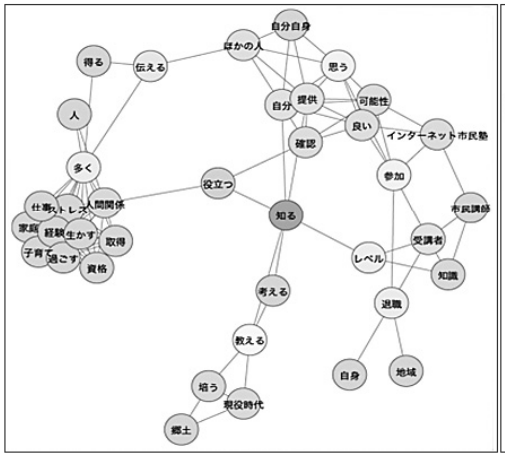

図3－1 抽出語共起ネットワーク図（参加時の文脈）
（N=7、抽出語=778、KH-Coder V2.00使用）

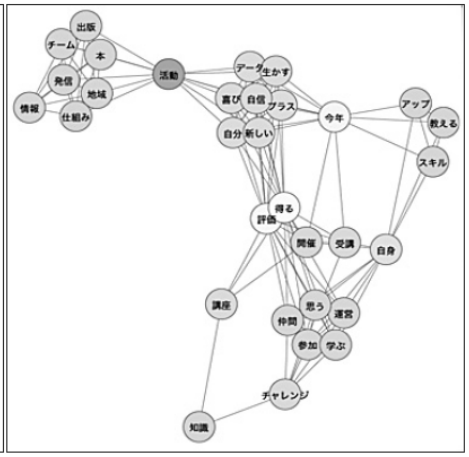

図3－2 抽出語共起ネットワーク図（1年後の文脈）
（N=7、抽出語=1049、KH-Coder V2.00使用）

3．学習動機とウェルビーイング

次に、学習に目を向ける動機からウェルビーイングを考えてみたい。内閣府の生涯学習に関する世論調査[15]では、18歳以上の約6割（58・4％）がこの1年の間に学習をしたことがあるとしている一方、「学習をしたことがない」者の約3割（31・1％）は「特に必要がない」と答えている。18歳から64歳の社会人を対象とした別の学習状況調査[16]では、「学びたいと思わない」とする回

表１　学習の実践による変化とウェルビーイング指標の対応（棚作成）

富山県が公表したウェルビーイング指標	参加時の言葉	1年後の調査で現れた言葉
総合的指標	退職　定年 社会の変化	自信 喜び　チャレンジ
分野別指数 (1) 心身の健康実感	異動 ストレス	
(2) 経済的なゆとり実感		
(3) 安心・心の余裕実感	人間関係 忙しい 介護	人との良い関係
自分らしさ実感	自分らしい自分はどんな自分か 自信を持ちたい	経験や学んできたことを振り返るようになった
自分時間の充実感	子育てと生活に追われて 介護	学び直したい
生きがい・希望実感	とだれも目標を与えてくれない もっと働きたかった	経験や学んできたことをもっと広く伝えることができそうだと思った 発信　本の出版　プラス
思いやり実感	忙しい	異なる意見の人とも良い関係を作ろうと考えるようになった
つながり指数 (1) 家族とのつながり	妻に母親を任せてきた まずは家族の絆の立て直しが必要だった	
(2) 友人とのつながり	退職とともに仲間がいなくなった	新しい交流が増えた ほかの人と積極的にコミュニケーションをとるようになった チーム
(3) 職場・学校等とのつながり	退職 現役時代 つながりがなくなった	新しい交流が増えた 異なる意見の人とも良い関係を作ろうと考えるようになった 他者と積極的にコミュニケーションをとるようになった
(4) 地域とのつながり		地域や社会の動きと課題に関心を持つようになった

＊それぞれの対応づけにあたって、富山県が行っている「県民のウェルビーイング意識調査」における質問項目を参考とした。

答が全体の半数以上（53・8％）にのぼる。必ずしも多くが学びに目を向けているとは言えない状況がうかがえる。

社会人に対する学習の動機づけは、就業を含む社会生活との相互作用の中で検討する必要があるとの指摘[17]がある。一人ひとりの社会的文脈の中で学習動機がどのように生起するか検討してみることが必要である。

そこで、インターネット市民塾参加者について、提供いただいたポートフォリオにより参加する前の社会的文脈を分析したところ図４のように示された[18]。図を一目してわかる通り、様々な問題意識を持ち、時には困難な状況も生じている。中には、〝流産〟、〝介護〟、〝疑問〟、〝強い〟、〝不安〟、〝苦手〟、〝人間関係〟など、深刻な問題も存在する。これらの言葉は、①退職や異動、定年など就業に関連する出来事、②家族や子育てなど家庭に関する出来事、③新しい枠組みや場を必要とする出来事の３つを主な構成要素として捉えることができる。その上で、これらを結ぶ言葉として〝問題意識〟や〝目標〟、〝人〟、〝新しい〟という言葉が存在する。〝新しい〟は、「自身のことを伝えることで、教え合う場ができ、新しい枠組みで自分のこれからを考えることができると思った。」などという文脈を形成している。背景に「自身への問題意識」が関わっている。特に、退職や異動、家族の状況の変化など、ライフステージの局面が

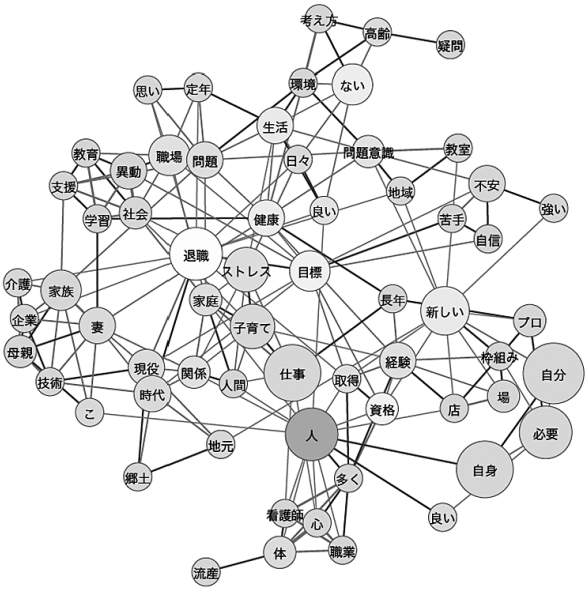

図４　抽出語共起ネットワーク図（対象テキスト：市民講師の背景）
（N=20、抽出語=1650、KH-Coder V2.00使用）
「市民講師に見る活動のモチベーションと変容の分析」(13) より引用

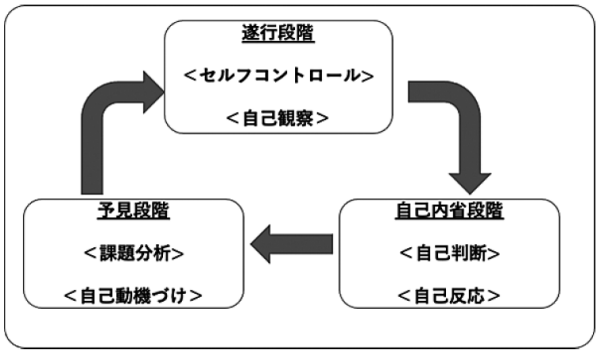

図５　自己調整学習フィードバックループ
（Zimmerman & Moylan,2009より）

関わっていることが明らかだ。直面しているこれらの課題を克服しようと、〝新しい〟、〝目標〟を模索することが学びに目を向ける動機づけに結びついていることが文脈解析からわかる。

このように、ポートフォリオに現われる言葉には、仕事や生活における社会的文脈の中で問題意識が生じ、その解決の一つとして学習に目を向けていく文脈を読み取ることができる。

ここで、学習に目を向けた要因をさらに検討したい。自らの意思で学習する自己主導学習（Self-Directed Learning）や自己調整学習（Self-Regulated Learning）についてこれまで多く研究されてきた。例えばZimmermanらは人が社会的相互作用によって自ら学び始める自己調整学習理論[19]の研究を行なっている。日々の中で自己観察（セルフモニタリング）することを通して問題意識（自己内省）が生まれ、その中から何をすべきか課題を分析し、課題解決に向けて自己動機づけが生まれるという自己調整フィードバックモデル（以下、フィードバックループと略）を発表している（**図5**）。これは、前述のポートフォリオ分析で見られた文脈にも当てはまる。

そこで先に示した対象者のポートフォリオ（学習参加前の社会的文脈）を、このフィードバックループに当てはめた（**表2**）。学習動機の生起に結びついた過程をフィードバックループの各段階に展開するとともに、富山県のウェルビーイング指標により分類した。

対象者のポートフォリオから抽出した「今の状況」、「何が問題か」という過程を経て、「どうなれば良いか」、「より良くしたい」という文脈の先にインターネット市民塾への参加があり、知識交流や学び直しが始まっている。この一連の過程はフィードバックループとして説明できる。**表2**はまさにウェルビーイング向上への意識が学びの動機に結びついていく過程が可視化されたものと言える。

もちろん、自己観察や内省が全ての学習の動機に結びついているとは言えず、また、全てのウェルビーイングの向上が学習の実践によるものでないことをふまえる必要がある。それでも、これらの対象者にはライフステージの状態が悪い中から生きがいを見出し、新たな人生を拓いた過程に学習の実践

があり、状況を良くしていこうとするウェルビーイング向上への意識が学びの自己動機づけに結びついたことは十分確認できる。

このように、ウェルビーイングの向上を意識することで、自己観察、自己内省を経て学びに目をむけるフィードバックループを回し始め、持続的に回し続けることは、生涯学習実践の姿ではないだろうか（図6）。

4．ウェルビーイングを学習活動に生かす

しかし私たちは日々の中で必ずしも意識的に自己観察しているとは言えない。日々の仕事や生活における状況を

表２　学習動機の生起の過程とウェルビーイング指標の対応（柵作成）

富山県が公表したウェルビーイング指標	自己調整フィードバックループによる文脈の展開		
	自己観察段階	自己内省・問題意識醸成段階	課題分析・自己動機づけ段階
総合的指標	退職 定年	可能性 社会の変化に対して問題意識を持っていた	今後の自分の展望を持ちたい 新しい枠組みで自分のこれからを考えたい
分野別指数 (1) 心身の健康実感	流産、異動、ストレス	自身の加齢に対して問題意識を持っていた	
(2) 経済的なゆとり実感	生活　職業　資格 子育て 定年	評価	新しい枠組み
(3) 安心・心の余裕実感	実績 介護	どの程度のレベルか自分では分からない	不安や苦手を克服して自信を持ちたい チャレンジ
自分らしさ実感		経験 自分らしい自分はどんな自分か 自信を持ちたい	母親の介護のため企業を退職 他者を通して自分を客観的に捉えたい 生かす レベルアップ 教えることで学ぶ
自分時間の充実感	介護	子育てと生活に追われて	
生きがい・希望実感	現役時代は常に目標が与えられていた	退職してしまうとだれも与えてくれない もっと働きたかった	自ら目標を作る 自分への投資 教えることで貢献 教えるために学び直す必要性を感じた 新しい立場に身を置く
思いやり実感	妻に母親、家族を任せてきた		母親の介護のため企業を退職 多様な価値観を得たい
つながり指数 (1) 家族とのつながり		まずは家族の絆の立て直しが必要だった	母親の介護のため企業を退職
(2) 友人とのつながり		仲間	人との新しい接し方
(3) 職場・学校等とのつながり	退職	退職してしまうと誰も目標を与えてくれない もっと働きたかった	母親の介護のため企業を退職
(4) 地域とのつながり		広がりが持てなくなるのではないか 転勤してきた地で新しい可能性を見出したい	関心 寄与　貢献 新しい枠組み 今までとは違う視野を持つ人たちと接したい 多様な価値観を得たい

＊それぞれの対応づけにあたって、富山県が行っている「県民のウェルビーイング意識調査」における質問項目を参考とした。

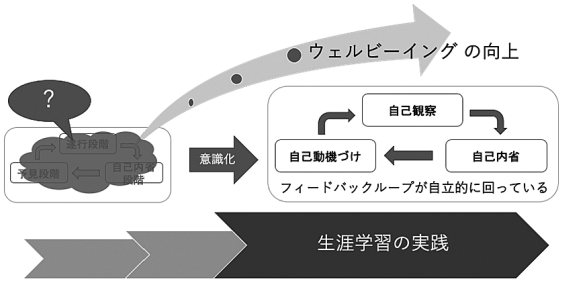

図６　自立的な生涯学習の実践とウェルビーイング向上の姿

記録している人も少ないのではないだろうか。状況をメタ認知する力、内省する力、新たな行動を自己決定的に行う力も一人ひとり異なる。フィードバックループを自立的に回すことは個人の意識に依存する。したがって、フィードバックループを何らかの形で意識化することが、生涯学習の実践支援の方策となり得るのではないだろうか。

そこで、**表２**のようにフィードバックループを可視化することに、ウェルビーイングの指標を役立てることはできないか検討してみたい。前述のように一人ひとりには仕事や暮らしの中でそれぞれの社会的文脈がある。これを自己調整学習ループの３つの段階でウェルビーイング指標がどのように役立つか仮説を立てた。

1）自己観察段階における意図的なモニタリング

日々の状況をウェルビーイング指標に照らし合わせて、今の自分はどうかを客観的に確認するメタ認知の視点として役立てる。

2）内省段階における問題意識の醸成

これまでの自分はどうだったか、これからはどうか、何が問題か、時間軸で状況を整理し内省することにウェルビーイングの指標を役立てる。

3）予見段階における自己動機づけの促し

ウェルビーイング指標に対応して、どうなれば良いか、そのために何をすべきかを考えるきっかけに役立てる。

4）自己効力感を持つ

自己観察や内省の中で、良くなっていることを自覚する視点にウェルビーイング指標を役立てる。

このように、ウェルビーイング指標に示されている項目と時間時軸を意識することで、自己観察、内省、今後に向けたフィードバックループが生まれやすくできるのではないだろうか。

この考えをもとに、自己決定的な生涯学習実践のモデルを表した（**図７**）。

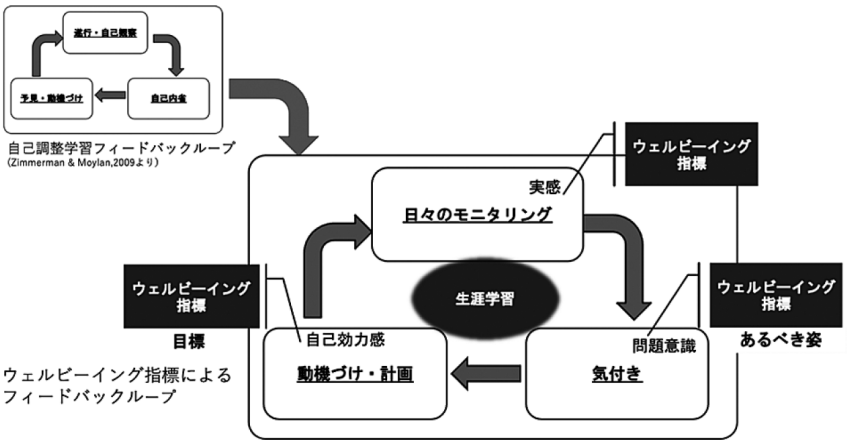

図７　ウェルビーイング指標を活用した生涯学習実践モデル
（Zimmermanらのフィードバックモデルを参考に柵作成）

5．支援の枠組みを考える

学習ニーズや支援ニーズの把握は、多くは「学習者」すなわち「学習にきている者」を対象に客観的な評価・分析として行われてきた。一方で学ばない者の視点で研究することの必要性も挙げられている[20]。世論調査などには

「学ばない理由」が統計的にまとめて報告されているが、それぞれの社会的文脈まで掘り下げて読み取ることはできない。「学びにきていない者」を起点とした検討が求められている。

富山県のウェルビーイング政策は「県民起点」を明確に打ち出している。この「県民起点」を生涯学習・社会教育の推進に当てはめて考えてみたい。発送は「個」のパーソナルな支援の枠組みである。これまで行われてきた生涯学習・社会教育推進施策に加えて、一人ひとりの仕事や暮らしにおける社会的文脈の中で主観的なウェルビーイングを起点とした「学びに目を向ける」支援である。

(1) ライフログの記録

日々の出来事や思いをポートフォリオとして継続的に記録することは多くの者にとって容易ではない。記録を続けるモチベーションを得るためのベネフィットが無いと、継続的な記録が行われにくいと言われてきた。

図8は、2012年に開発・試行利用したスマートフォン用のポートフォリオ記録アプリである[21]。現在のウェルビーイング意識にもつながるモチベーションをグラフで可視化できる。スマートフォンを利用していつでもどこでも記録し即座に反映したグラフを見

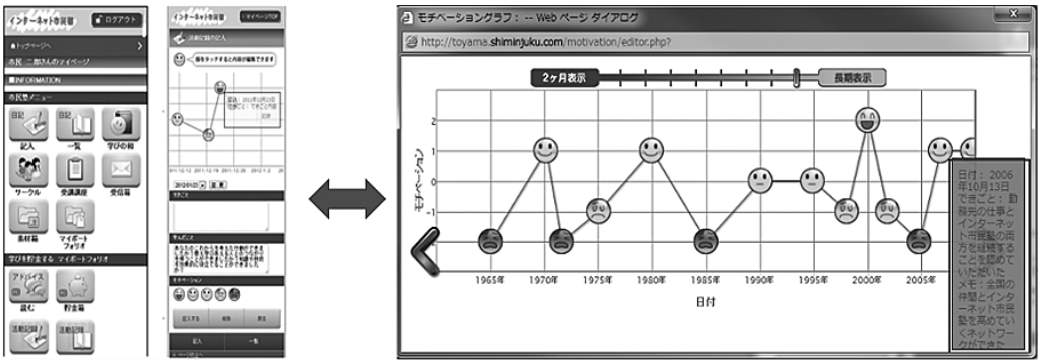

図8　ポートフォリオ記録のためのスマートフォンアプリとパソコンによる記録の表示
(2012年に開発し調査研究事業で実証的に活用)

ることが記録のモチベーションを上げた。現在、SNSなど日々の記録をライフログとして記録する仕組みを加えることは難しくない。対話型AIを使ってさらに多様な情報の入力が可能になっていることから、記録の容易性は飛躍的に高くなっていると言える。

(2) ウェルビーイング指標による自己観察・自己評価

すでに富山県が提供しているウェルビーイングのセルフチェックを一歩進め、表2のフィードバックループを可視化し、自己決定的に回す仕組みとして提供してはどうか。現在はウェルビーイング指標の質問に答える形で利用されているが、ライフログの記録を表2のようなフィードバックループにある程度自動的に展開した表示を可能とする。日本語・文脈解析の技術が応用できる。この考え方を応用したウェルビーイングのセルフモニタリングを支援する仕組みを示す（図9）。

(3) 学習機会への動機づけ

ウェルビーイング指標に分類された記録をもとに、学習機会や活動機会を検索することでフィードバックループの状況に合った様々な情報を得ること

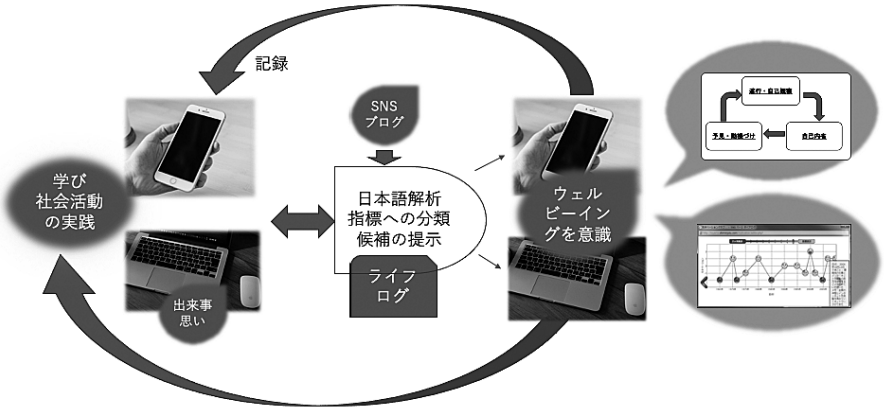

図９　ライフログの記録と自立的なフィードバックループの促進

が期待できる。これを自身の意思で行うだけでなく、自動的に検索して候補を提示することはＩＴ（情報技術）により容易に実現できる。定期的な提案や社会的文脈に応じたタイムリーな学習機会情報の提供を受けることが可能となる。また、人による学習相談の機会にも大いに役立つ。自身の状況や目標を的確に説明することで、適した学習機会や場の提案を受けることができる。

ＩＴを活用したパーソナル型支援は、これまでの「提供する側」の事業の枠組みと連携することで新たな可能性も見えてくる。一人ひとりのパーソナルなニーズに応じたオンデマンド型のプログラムの開発や情報提供が期待できるようになる。ｅポートフォリオを活用してパーソナルなニーズに対応した学習プランづくりを行う支援は、ＥＵ等ではごく一般的に行われている[22]。また、一人ひとりの自己決定的学習のレディネス尺度（ＳＤＬＲＳ）[23]を用いた効果的な学習支援も考えられる。

一人ひとりが自立的にフィードバックループを回しながらウェルビーイングを深め、それぞれの段階に応じたパーソナルな学習ニーズに生涯学習推進・社会教育行政が応える形は、「県民起点」を打ち出す富山県のウェルビーイング推進の姿と言える。

6．おわりに

本稿では、富山県のウェルビーイング政策の紹介を通して指標を政策に生かす視点を説明するとともに、一人ひとりがウェルビーイングを深めるための自己決定の視点から、指標を活用した生涯学習の実践を促進する方策を述べた。

富山県は昨年開催されたＧ７富山・金沢教育大臣会合の成果をもとに、子どもたちのウェルビーイングを支え・高める施策に取り組もうとしている。生涯学習・社会教育についても注目しているところである。学びに目を向ける支援の枠組みは、「県民起点」のウェルビーイングの活用を大きく進める具体的な手立てになるとともに、県民のウェルビーイングを高める大きな柱になることが期待される。

本稿で提案したウェルビーイング指標を活用した生涯学習の促進は、実践評価を検討している[24]。県民からモニターを募り一定期間にわたってライフログの記録とウェルビーイング指標のモニタリングを行っていただく。参加者はスマートフォン用のアプリを使って、日々の出来事や思っていることを簡単な操作で記録し、ウェルビーイング指標によって分類された自身の状況をいつでも確認できるようにする。一

定期間ごとに学習レディネス尺度（SDLRS）による調査に協力いただき、学習の実践とウェルビーイングの変化を分析することを検討している。

この実験評価には、生涯学習・社会教育関係者やAI研究者なども参加を予定しているほか、広く参加を呼びかける。それぞれの視点で成果を共有していただくとともに、ウェルビーイングを視点とした生涯学習・社会教育の推進に役立てたい。

＊本稿は、拙著「ウェルビーイング指標から見た生涯学習実践の考察　～持続的な学習への動機づけのかたち～」（関西生涯教育論叢第2号、2023年9月）をもとに、最新情報と新たな考察を加えて編集したものである。

参考文献

1）富山県成長戦略、2022年（令和4年）2月
https://www.pref.toyama.jp/documents/24885/senryaku_p1-p37.pdf
2）次期教育振興基本計画（答申）、2023年（令和5年）3月
https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_soseisk02-000028073_1.pdf
3）柵　富雄、「ウェルビーイング指標から見た生涯学習実践の考察」、関西生涯教育論叢、第2号、pp.49-51、2023年9月
4）柵　富雄、「ウェルビーイング指標から見た生涯学習実践の考察」、関西生涯教育論叢、第2号、pp.52-53、2023年9月
5）、6）富山県、「ウェルビーイング指標の策定について」、2023年1月
https://www.pref.toyama.jp/documents/30839/toyama-wellbeing-indicator.pdf
7）富山県、「令和5年度ウェルビーイング県民意識調査」
https://www.pref.toyama.jp/100224/r5wellbeing_chosa.html
8）富山県、「令和5年度でのウェルビーイング指標の活用について」、2023年（令和5年）1月
https://www.pref.toyama.jp/documents/30839/r5_utilization_of_indicators.pdf
9）総務省「第8回地方公共団体における統計データ利活用表彰」、2023年（令和5年）10月
https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01toukei09_01000082.html
10）富山県ウェルビーイング特設サイト
https://wellbeing.pref.toyama.jp/?utm_source=qrcode&utm_medium=web&utm_campaign=web01
11）富山県、「令和5年度県政世論調査結果概要について」、2023年（令和5年）11月
https://www.pref.toyama.jp/documents/36961/teiseisokuhoutir5.pdf
12）インターネット市民塾について
　1999年に地域事業として富山で運用を開始した。市民がインターネット上に学びの場を自発的に開設し、既存の制度・枠組みでは見られない市民を多く集めた。問題意識を共有し生き方に共感する中で、自身のありようを見つめ新たな社会参画を考える創発が数多く生まれた。学習センターなど既存の機関を有する官民学の多様な客体が、これらの学びと地域人材化を支援するコンソーシアムが具現化した。
　富山でのインターネット市民塾は、2016年に大学関係者に運営を引き継いでいる。その後、官民学のコンソーシアムは解散し現在は別の形で運用されている。
13）柵富雄、「市民講師に見る活動のモチベーションと変容の分析」、日本生涯教育学会年報、第37号、pp.189-207、2016
14）柵　富雄、「ウェルビーイング指標から見た生涯学習実践の考察」、関西生涯教育論叢、第2号、pp.49-51、2023年9月
15）内閣府、「平成30年度生涯学習に関する世論調査」
16）ベネッセグループ、「社会人の学びに関する意識調査」、2022
https://www.benesse.co.jp/lifelong-learning/assets/pdf/news-20230120-report.pdf
17）バンデューラ（Bandura）は「社会的学習理論」の中で現実の社会との相互作用に着目して学習を決定づける構造を定義した。Bandura、A. Social Learning Theory (1977) Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
ノールズ（Knowles）は、「成人教育の現代的実践」の中で「成人の多くは現在の生活状況において感じているプレッシャーへの対応という形で学習に参加する。成人にとって教育はとは、自分たちが現在直面している生活上の問題に取り組み能力を向上させるプロセスなのである。」とした。
S.Knowls、堀薫夫・三輪建二監訳「成人教育の現代的実践―ペタゴジーからアンドラゴジーへ」、鳳書房、pp.51-55、2008
18）柵富雄、「市民講師に見る活動のモチベーションと変容の分析」、日本生涯教育学会年報、第37号、pp.189-207、2016
19）自己調整学習研究会、「自己調整学習～理論と実践の新たな展開へ～」北大路書房、2012
20）梨本雄太郎、「ポスト・コロナ期における学びの本質の再検討」、日本青年館、「社会教育」2022年7月号（913号）pp.18-23
21）文部科学省「一人ひとりのeポートフォリオ

が社会に生かされる学習基盤の構築に関する長酒級報告書」、地域ｅパスポート研究協議会、２０１２年（平成23年）３月
22）ＥＵではヨーロッパ共通に技能・資格の証明としてユーロパス（Euro Pass）が普及している。教育機関における学習相談などにｅポートフォリオが利用されている。例えば、イギリスでは自己開発の計画（PDP: Personal Development Planning/Program）と呼ばれる仕組みがあり、大学や継続的なキャリア開発を支援することに利用されている。加藤かおり、「イギリスの高等教育におけるＰＤＰ（４）」、シリーズ大学と社会を結ぶｅポートフォリオ（第16回）、文部科学教育通信№２８９、pp.16-17、２０１３
23）自己決定型学習のレディネス指標は、Guglielminoが１９７７に発表している。これを日本語版として作成し評価が行われている。松浦和代・阿部典子ほか「日本語版ＳＤＬＲＳの開発―信頼性と妥当性の検討―」、日本看護研究学会雑誌 Vol.26 №1、２００３、pp.45-53
24）地域学習プラットフォーム研究会として計画中。１９９４年に発表したインターネット市民塾や、その社会実験事業・官民学コンソーシアムによる運営を通した社会人の学習参加と変容、ｅポートフォリオ研究や学習の動機づけ研究などを生かして実証評価を行う。実証評価に活用するｅプラットフォーム（https://e-platform/org/）は、ライフログの記録やウェルビーイングを考える居場所づくりを目指している。実践の成果やノウハウの共有などの条件の下、非営利で広く利用を提供している。現在生涯学習センターやＮＰＯ団体、地域活動団体等の官民学がサイトを設けそれぞれの社会事業の一環として利用している。
（詳細は地域学習プラットフォーム研究会support@shiminjuku.org）

社会教育の再設計シーズン２ 新書判

『多様な実践者がひろげる社会教育』

～未来への羅針盤をつくる知の冒険～ 社会教育の再設計：シーズン２
今村久美・大畑伸幸・河内ひとみ・左京泰明・宮城潤

発行　日本青年館　2021 年 11 月 30 日　新書判　64 頁　編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価 550 円（本体 500 円＋税）　ISBN978-4-7937-0141-2

社会教育の再設計：シーズン１ 新書判

～未来への羅針盤をつくる知の冒険～

『社会基盤としての社会教育再考』

寺脇研・山崎亮・小田切徳美・吉田博彦・牧野篤

発行　日本青年館　2020 年 12 月　新書判　160 頁　編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価 880 円（本体 800 円＋税）送料 180 円　ISBN978-4-7937-0140-5

◆ご注文は最寄りの書店、又は日本青年館までお申し込み下さい◆
発行（一財）日本青年館「社会教育」編集部　〒160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町 4-1　【電話】03-6452-9021【FAX 】03-6452-9026
【メール】social-edu@nippon-seinenkan.or.jp　【ホームページ】https://social-edu.com